

京鹿子

ISSN 1000-0001
第 21 卷 第 10 期
2001 年 10 月 10 日
第 10111 号



10月号

— 近 詠 —

白日傘 丸山佳子

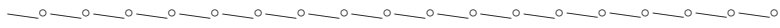
ル—ブル展終らぬうちにと髪洗ひ

初鮎にま白お手拭き汚さじと

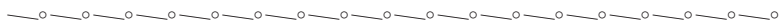
白日傘の一寸先に大自然

憧れてならぬ物見て汗冷ゆる





立秋にまだ成り切れぬ千切れ雲
サーキットに大人ばかりや盆休み
光陰の矢先にハイと去ぬ燕
世の中がまた変わります桐一葉
よく迂る山の横腹鹿よぎる
良い汗を拭かせて貰ひ山下る



豊 田 都 峰

渥 響 集 その二

沖 島 へ わ た る つ も り の 蝶 の 舞
朝 か ら は 田 ま は り も し て 生 身 魂
自 画 像 を 頭 上 に 一 献 生 身 魂
草 い き れ 急 先 鋒 は 折 れ や す し
折 れ て よ り 片 陰 の な き 壬 生 屯 所
と ん ぼ 湧 く 空 を い た だ き る 散 歩



玉虫や彩負ひゆくは祈りなる
草笛やひぐれの雲はとほすぎる
夕星や草笛いまもかすれ吹き
ぎしぎしや石碑古びし村の口
つゆ草の一花は小督の墓のもの
露のせて遠きに触るる日もありて
今年またひだりへ露のあだしの路
風化仏露いろどりのほほえみに

秀華採集

礎上る百段目にゐる黒揚羽

西村 滋子

「百段目」とした時に、具体的であるとともに、心象化がはたされている。なにもむつかしく言わなくても重層化すれば、深さなども滲んでくる。

鉛筆の噛みあと古く桜桃忌

福 永 光子

かばちやごろごろ葛藤の一等地

西 村 摩耶子

若き日の人生か文学かの悩みが具体化され「桜桃忌」がたいへん効果的である。後句の「葛藤の一等地」に馬鹿さ加減があり、その具体の描写に一段の思いがある。

近 詠

案山子立つ

鈴鹿
仁

もの葉の露のひかりの仏みち
ひぐらしやよすがの山の人となる
初あきつ仏みちへと誘ひ込む
案山子立つ雀の私語の聞きもして
鳥の眼の風を占ふ白露の日
一意もて雲は流るる吾亦紅

新関一杜氏追悼

遠雷に遺訓めく日の愛となり

神麓集



松田 都青
 気がつけば老いの海にて立ち泳ぎ
 流離とはこんな形か滝落つる
 うす衣や洗へば消ゆる愛で染め
 アイリスや語りかけたき美少年
 梅雨の夜やいつもの魔女が来る小窓

花 火 彌 寝 瓶 史

花火の夜怪獣飴のよく売れる
 揚花火思はず踵浮かしけり
 「てにをは」の抛無し揚花火
 連発の花火おじやみに掌の疲る
 海中花火魚の夢見る花でなし

船越 美喜
 蝸牛一步護るを高きとす
 常ながら浅き夢みし夏の暁
 青時雨白鷺いつも一本脚
 余生とはいつからのこと蓮閉づ
 アイリスのむらさき愛す卓の上

丹生をだまき
 大和郡山
 石垣のみ遺す城址青嵐
 睡蓮を縫つてお堀を蛇渡る
 十五万石の殿の遺愛の白い金魚
 ピチピチの若者働く金魚池
 真正面の金魚の真顔可笑しけれ

栗ごはん 竹貫 示 虹

身に入むやベツドのつひのありがたう
 ごはんよの声のしさうな秋の暮
 あづまはや日暮れて黄泉も黄落か
 秋深し一人ぐらしに慣れもして
 栗ごはんおいしくて泣く妻あらば

柴田 朱美
 凌霄花
 葉隠れの凌霄に血を貰ひけり
 おどけても淋しさ残る凌霄花
 凌霄花爛れて犬歯浮いてくる
 凌霄花華麗なる過去ひきずつて
 凌霄や昨日の続き読み耽る

神麓集



いのちの艶 北川 孝子
 静謐てふ千家の塀の青き梅雨
 梅雨もまた過客よ京に昆布売る
 桜桃忌いまにつたはる命あり
 形代にしるす齡のおそろしき
 青水無月いよよいのちの艶めきし

夜の秋 伊藤 希眸
 母のうた風とハモリぬ夜の秋
 夜の秋しばし碁石のゆき交ひし
 つくろひ物無き夜の秋嫁姑
 そのポタン押して屋上夜の秋
 夜の秋土間に野菜の積まれをり

紙魚丸井 巴水
 青紙魚のいまだ序章に留まれり
 遙かなる祖先の御霊宿す火蛾
 息吸つて夏嶺に立たば叫びあり
 ジーパンの乾く硬直良夜かな
 飛べる翅もちて逃げ足使ふ紙魚

酔ひどれ天使 川崎光一郎
 夏の月酔ひどれ天使にもならず
 過疎村の寂けさ煽る蟬の声
 夕蟬になにか急かるる八十路かな
 七月や静脈浮きし妻の脚
 夏の夜の悪女きはだつドラマかな

梅雨晴間 荻野 千枝
 洗はれし山の静かな梅雨晴間
 夏木立天狗出さうな九十九折
 死者生者かたみに濡るる花十葉
 羅をなびかせ庫裡に消えし僧
 梢冥き後方に夏の月うかぶ

旅愁 奥村 鷹尾
 七夕の色紙踊らせ笹の風
 須臾の間を花の佐保なり只の溝
 春泥に宿の下駄借り履き悩み
 振ぢ花や烏柄杓が舌延ばす
 雪解水音立て初めし旅宿の樋



京鹿子集

豊田都峰選

礎上る百段目にゐる黒揚羽

大蟻の菩薩へ寄り道してをりぬ

高麗門一緒にくぐる夏の蝶

峰涼し石が仏になり話す

村中の水恙なし半夏生

緑蔭に席空けておく母の日に

かな文字の祈りやさしき星祭り

鉛筆の噛みあと古く桜桃忌

拜啓にはじまる風の落し文

神杉に胸襟ひらき夏祓

福知山 西村 滋子

宮崎 福永 光子

かぼちやごろごろ葛藤の一等地

梅干の塩味に余生を確かむる

朝つばめ雨意の重さを反り返す

わら帽子脱ぎ山門の風を被る

不揃ひの実梅今年^の消息と

門々の黄金^{さん}の紋章風光る^(オランダ・ペキイ)

黒き馬御者は女性よ風光る

コンサート跳ねて夏の陽まだ高し

煉瓦家の窓々飾る赤い薔薇

柵のなき牧場の牛や夏は来ぬ

亀岡 西村摩耶子

さま 神田 惣介